

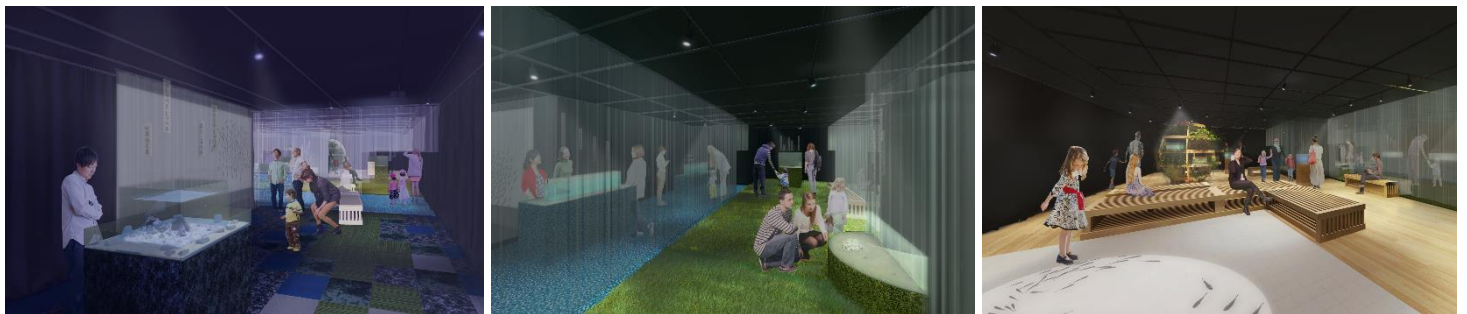
空間内で“海の世界と人の世界の要素が混じり合う”特別展

海に住んでる夢を見る展

の詳細が決まりました！

海遊館(大阪市港区)では、2019年3月15日(金)から2020年1月7日(火)まで、海遊館エントランスビル 4Fにて、特別展「海に住んでる夢を見る～魚と私のふしぎなおうち～」を開催します(2019年1月23日、報道発表済み)。

海遊館では“サメ”や“魚の顔”など、毎回テーマを変えた特別展を開催し、生き物たちと自然環境の面白さをお伝えしています。今回は魚と人にとって身近な「住」をテーマに、生きる工夫や暮らし方が特徴的な魚たち 13 種約 115 点を展示します。その他、広い海を「住」として生活する“群れる魚”を、Boids(ボイド)と呼ばれるシミュレーションプログラムで再現した壁面映像や、鑑賞者の動きに合わせて魚の群れが集まってくるインタラクティブなデジタルインスタレーション、生き物すべての「住」である地球をテーマに、植物と生き物を同じシステムの中で育てる循環型栽培の仕組み「アクアポニクス」(直径約 2.2m、高さ約 2.2m)も見所です。



「海に住んでる夢を見る展」内観イメージ

空間構成は、人気ロックバンド”ASIAN KUNG-FU GENERATION”のツアーステージデザインなども手がける建築家光嶋裕介氏が担当しました。「境界と気配」をコンセプトに、長さや透過性が異なるカーテンを幾重にも重ね、床材はエリアごとにカーペット、人工芝、木材、磁器質タイルなど異なるものを採用しています。カーテンが生み出すゆらめく景色と人の住まいの素材のコラージュで構成された空間は、まるで夢の中にいるような風景を生み出し、鑑賞者の五感を刺激します。キャプションは、劇作家の石神夏希氏が制作・監修し、鑑賞者の内面への問いかけや想像力を喚起する物語のようなことばが空中を揺らめくように展示されています。さらに展示生物のイラストを魚譜画家の長嶋祐成氏が本特別展のために描きおろしたり、会場内で流れる BGM をミュージシャンの Polar M(ポーラーエム)氏が作曲していたりと、様々な分野のクリエイティブのプロがそれぞれの感性で表現した「住」を空間内で融合させ、一つの展示(作品)として作り上げました。

空間内は、海の世界と人の世界の要素が混じり合った独特な世界感に包まれており、イメージーションをかき立て、魚たちの面白さや魅力への「新たな気付き」を生む工夫が詰まっています。まるで絵本の世界に足を踏み入れたような鑑賞体験を通して、魚たちの生きる工夫や暮らし方に共感して頂き、自然への興味関心を深めていただきたいと思います。

メディア関係者の皆さまへ

オープン当日、3月15日(金)9:15からメディア関係者向け撮影会を実施いたします。

ご希望の方は、3月14日(木)17:00までに広報チームまでご連絡ください。海遊館 広報チーム 06-6576-5529

【特別展「海に住んでる夢を見る ～魚と私のふしぎなおうち～」について】

開催期間 2019年3月15日(金)～2020年1月7日(火)

時間 海遊館営業時間と同じ

場所 海遊館エントランスビル 4F

料金 無料(海遊館の入館料に含む)

展示種 13種約115点(アクアポニックスを除く)

ガンガゼ、ヘコアユ、ミナミトビハゼ、ワニアマダイ、カイカムリ、コトブキテッポウエビ、ヒレナガネジリンボウ、キンチャクガニ、ソメンヤドカリ、インダタミヤドカリ、マダコ、ハタゴイソギンチャク、カクレクマノミ

問合わせ 海遊館インフォメーション 06-6576-5501

【主な展示生物について(イラスト:長嶋 祐成氏)】



▲貝殻や海綿を背負って身を隠す
「カイカムリ」



▲巣穴作りと見張り役を分担し一緒に暮らす
「コトブキテッポウエビとヒレナガネジリンボウ」



▲イソギンチャクをハサミ脚に持つ
「キンチャクガニ」



▲身を守るために貝殻を背負い、
イソギンチャクを貝殻に付ける
「ソメンヤドカリ」



▲刺胞をもつイソギンチャクと一緒に暮らす
「ハタゴイソギンチャクとカクレクマノミ」



▲岩の隙間や穴の中に身を隠す
「マダコ」

【アクアポニックスについて】

生き物と植物を同じシステムの中で育てる循環型栽培の仕組みをアクアポニックスと言います。今回、球体のアクアポニックス(直径約2.2m、高さ約2.2m)を展示することで、生き物すべての「住」である地球の循環と共生を表現しています。アクアポニックスには、日本で見られる生き物たち10種87点を展示し、身近な自然を感じていただけます。



【デジタルインスタレーションについて】

床面に水中を泳ぐたくさんの魚のシルエットを投影します。そのエリアに足を踏み入るとバラバラに泳ぐ魚たちが“魚群”となり、鑑賞者の足元に集まるという仕掛けを、センシング技術で表現しています。インタラクティブな体験を通して“群れる魚”の面白さを体感していただけます。



【参考資料】

◆光嶋 裕介(こうしま ゆうすけ):空間構成担当

1979年、アメリカ・ニュージャージー州生まれ。建築家。一級建築士。

早稲田大学理工学部建築学科卒業。2004年同大学院を修了し、ドイツの建築設計事務所で働く。2008年帰国後、独立。2011年、内田樹氏の自宅兼道場《凱風館》(神戸)を設計、若手建築家の登竜門である「SDレビュー」2011に入選。建築作品に《如風庵》(六甲・2014)、《旅人庵》(京都・2015)、《森の生活》(長野・2018)など多数。神戸大学で客員准教授、大阪市立大学などで非常勤講師を務める。

著書に『みんなの家。建築家一年生の初仕事』(アルテスパブリッシング)、『幻想都市風景』(羽鳥書店)、『これからの建築—スケッチしながら考えた』(ミシマ社)、『ぼくらの家—9つの住宅、9つの物語』(世界文化社)など多数。2015年、Asian Kung-Fu Generationの全国ツアー《Wonder Future》のステージデザインを担当するなどその活動は多岐に渡る。

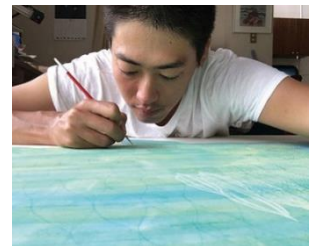


◆石神 夏希(いしがみ なつき):物語担当

劇作家。1999年より劇団「ペピン結構設計」を中心に活動。近年は国内各地の地域や海外に滞在し、都市やコミュニティを素材とした演劇やアートプロジェクトを手がける。NPO法人「場所と物語」理事長、遊休不動産を活用したクリエイティブ拠点「The CAVE」の立ち上げおよびディレクション、「東アジア文化都市 2019 豊島」舞台芸術部門事業ディレクターなど、空間や都市に関するさまざまなプロジェクトに携わる。

◆長嶋 祐成(ながしま ゆうせい):イラスト担当

1983年大阪生まれ。魚譜画家。京都大学総合人間学部卒。現代思想を専攻。卒業後、思想と社会の接点を模索して服飾専門学校に進学、クリエイティブを学ぶ。同卒業後はアーティストブランドに一年間勤務ののち、広告・コミュニケーションの業界へ転職。7年間ディレクターを勤める。その傍ら行なっていた画業を2016年4月からは本業とし、石垣島へ移住。



◆藤本 直明(ふじもと なおあき):デジタルアート担当

アーティスト、フリーランサー。東京工業大学理学部物理学科卒業(素粒子物理学)。「体験」そのものの制作を目的とした作品制作を行う。代表作の《Immersive Shadow》は、国内外の美術館や建築物の外壁へのプロジェクションマッピングなどで50回以上の展示実績を持つ。他の作品として、《覗かれ穴》《衝突と散乱》《新しい過去》など。多摩美術大学および東京工芸大学、非常勤講師。

◆Polar M(ポーラーエム):BGM担当

音楽家。ギターサウンドを中心に、繊細ながらも強い情感をもったサウンドスケープを展開する。これまでにアルバム『Hope Goes On』(2014)、『Nothern Birds』(2011)等を発表。国内外でのライブ・パフォーマンスをはじめ、映像作品やCMへの楽曲提供、アートプロジェクトへの参加、音楽ソフトウェアに関する執筆など、幅広く活動している。

